

むかし・いにしえ

——日本語雑記・拾遺——

工藤力男

クイズをどうぞ

◎あなたは次の各文に何か違和感を覚えますか。

- 1 留学者はここ10年頭打ち。特に米国留学は1997年の4万7千人から右肩下がりで、一昨年3万人を割った。(新聞・記事)
- 2 大家は(中略)、度重なる右肩の故障にも悩まされ、昨年インディアンスからFA(フリーエージェント)となった。(ウェブ)
- 3 異色のシンガー・ソングライターだ。2001年に歌手活動を開始。昨春アルバムデビューを果たした。(新聞・記事)
- 4 それでも今春、医療保険制度改革を法制化したのに続き、六月末には、金融規制改革に道筋をつけた。(総合誌)
- 5 以上はごく最近出会った柿の木だが、柿は北海道をのぞく日本の至るところにある。(エッセイ)
- 6 翌年、老中への就任が決まっている斉韶をこのままにしておけば、国の存亡に関わると判断し、お目付役・島田にその命を下します。(新聞・テレビドラマ解説)
- 7 「(エジプト革命)前夜演説し、辞任を否定した。ところが翌日、副大統領から退陣を発表されるこ

とになった。(ウエブ・新聞社説)

これは、昨年、「岐阜・日本語教育研究会」四月例会で、会員にアンケートとして提示した二十一项(もとは横組み)から選んだものである。「違和感があるとしたら、すべてに共通すること」と補足して十分ほど考えてもらった。違和感があるかという変な問なので、みな一様に困惑し、特に違和感はないという声が多くあがる一方、読点がたりないという意見もでた。それも真相に迫る視点の一つであるが、全部に該当するわけではない。

種あかしはあとに回して議論を進めよう。

物語の冒頭から

高等学校の古典の時間によんだ懐かしい伊勢物語から、二つの段の冒頭部分をひく。

・昔、男、初うひかうぶりして、平城ならの京、春日の里にしろよしして狩に往にけり。(初段)

・昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまのかたに住むべき国求めに、とて行きけり。(東下りの段)

この冒頭の形は、いわゆる昔話の「昔、ある所に、おじい

さんとおばあさんが……」に引きつがれていること、いうまでもない。

本稿の標題に用いたもう一つの語「いにしえ」について、物語には適当な用例が求め難いので、萬葉集の歌からひく(括弧内の数字は「国歌大観」の歌番号)。

・いにしへにありけむ人も我が如ごとか妹いもに恋ひつつ寝いねかてずけむ(497)

・いにしへに妹と我が見しぬばたまの黒牛瀉を見ればさぶしも(1798)

・いにしへに織りてし機はたをこの夕へころもに縫ひて君待つ我を(2064)

物語冒頭の「昔」と比べるべく、歌の初句におかれた例をあげた。いずれも述語の連用修飾語で、事態の実現した時を表わす。すべて助詞「に」がついている。

「むかし」はどうだろうか。同じように萬葉集から連用修飾語としての用例を拾う。

・昔見みし象かみの小川を今見ればいよよさやけく成りにけるかも(316)

・我が命も常にあらぬか昔見みし象かみの小川を行きて見むため(332)

・我^わ妹^こ子は常世^{とこよ}の国に住みけらし昔見しより若^をちましにけり (650)

原表記は「昔」で、ほかの訓はもとより、音数律からも「むかし」は考えられない。

この両語のあいだで助詞「に」の承接に違いがでる原因は判然としない。考えられることは、語構造が不明な「むかし」に対して、「いにしへ」は「往^いにし方^へ」であろうと推測され、原義を想起して用いられえたとに違いない、ということがある。

ここでは、「むかし」と「いにしへ」の語義の違いに関する議論には立ち回らない。ただ、奈良時代にはまだ感じとられたらしい違いが、平安時代には次第に曖昧になったこと、鎌倉時代以後、「むかし」が広く用いられて「いにしへ」の領域を侵したことで、そして「いにしへ」が古語的・文語的になって現在に至っていることは確かである。

そこで、伊勢物語の「昔」である。現在の高校の教科書などは、右にあげたように適宜に漢字をあて、句読点をうって掲げている。前節のクイズに、会員の一人が違和感の原因を読点の缺如に求めたのはそれであろう。例えば、5の「最近出会った」について、4・6のように読点をうつ

て、「最近、出会った」とすべきだというのだろう。わたしの書き方もそうなので、十分に理解できる考えである。

さて種あかし。原文は、1「昨年に」、2「昨年に」、3「昨春に」、4「今春に」、5「最近に」、6「翌年に」、7「翌日に」、である。すなわち、わたしは用いない箇所におかれた助詞「に」をすべて削って提示したのである。読者諸賢はどうだったろうか。

近年の実例

冒頭に掲げたクイズの例だけではわからない。さらにくつかの語に一例ずつ、引用部分も最短を心がけ、出典と文章の種別を簡単に括弧がきする。原資料の組み方を無視してすべて縦書きにするので、アラビア数字による表記は異様であるが、これも日本語の現実である。

初めは過去時の表現に用いられた名詞の例。

8 昨秋¹に出版された一冊の本。(2009.1.11 新聞)

9 昨夏²に汗をかきながら寄って下さった時、好感の持てる方だと感じました。(2009.11.15 新聞・

談話)

10 おととしに廃液がもれる事故が起きています。

- (2010.1.29 ラジオ)
- 11 葛飾区が今年度に試行したのも、まさにこの方針に反応したものだ。(2011.1.16 新聞)
- 12 2人は取材現場で出会い、昨春に真剣交際へ発展。(2009.12.10 ウェブ)
- 13 即時停戦などを盛り込んだアフリカ連合(AU)の仲介案は先月に一度拒否されているが、(2011.5.31 ウェブ)
- 続いて未来時の表現に用いられた例。
- 14 今春に女子生徒として地元の中学校に進む予定になつており、(2011.1.20 ウェブ)
- 15 今夏に宮崎県総合博物館の企画展に出されるのを機にポーズを変える。(2009.3.1 新聞)
- 16 メキシコ 来年に政権交代か(2011.10.19 新聞・見出し)
- 17 02年に結ばれ、7年後の今年に見直すことになつていた。(2009.2.8 新聞)
- 18 ロシアは来春に大統領選挙を迎えるが、メドジエーエフ氏は自らの出馬には言及しなかった。(2011.6.19 新聞)

- 19 今秋に一部区間で片道39ドル(税別)という激安チケットを売る。(2010.7.4 新聞)
- 20 将来に予想される対ソ連戦を有利に戦えるように、国境線を北へ上げておく、これに尽きる。(2010.12.5 エッセイ)
- いずれも、時を表わす名詞が述語を修飾する文脈で助詞「に」をとる現象である。なお、新聞は朝日新聞である。
- このことが最初に気になったのは八年前、ある作家の随筆に「良き時代のベルリンを歌ったドイツ語の歌のLPは、昨年に手に入れた。」(岩波書店『図書』2004.6)をよんだ時である。以後、それより古い例もいくつか目にした。注意ぶかく探したら、なお多く見つかるかもしれない。ここにあげたのはこの両三年のものである。
- 記述を簡略にするために、時の名詞だけのものを《単独形》、助詞「に」が接したものを《二接形》と仮称する。右の諸例をみてみると、次のような疑問がわいてくる。近年、二接形が多く目につくように感ずるが、それは確かなことか否か。確かなことなら、それは日本語史上にいかなる意味をもつのか、と。

時詞の文法論

この語類の研究史を一瞥しておこう。

早く注目したのは吉澤義則『日本文法（理論篇）』（1950）らしい。すなわち、意義は物の名を表わし、職能は副詞的な用法をもつ単語を《時数詞》と名づけ、時数詞のうちの《時詞》を二分し、「明年中、明日中」などを《期間時詞》、「明年、明日」などを《期点時詞》とした。そして、期間時詞は助詞「に」を伴って副詞的に用いられるが、期点時詞は「に」を伴って用いられることがない、とした。

名詞の中に特に「時詞」なるものをたてる根拠はないとする意見、例えば橋本進吉の『改制新文典文語篇』がある。吉澤はそれに対する反論で固めた記述を展開している。現在も、特に「時詞」なるものを名詞の中に区別する根拠はないとする意見があるが、ここではそのことに深入りせず、それを認めるたちばで考察する。

鈴木重幸『日本語文法・形態論』（むぎ書房 1972）は、連用修飾語のうち、時、所、原因、理由を表わす語類を《状況語》と称する。同書に、ときをあらわす状況語のうち、「つぎや 情態が なりたつ とき」としてあげた例文のうちの二つをひく。

21 きのう ぼくは おかあさんと いっしょに

サーカスを みに いった。

22 北海道では 五月に さくらの 花が さきます。

《はだか格》（本稿の単独形）と、《に格》（本稿の二接形）の使い分けの条件はまだ十分に調べられていないとしたが、「きょう、きのう、あした」など、話し手のおかれた時を基準にするときは単独形が用いられ、「六時、明治時代、夏休み」などは、ふつう、二接形が用いられるとした。ここで、「話し手のおかれた時を基準にする」は、指示語「これ」「それ」などについて三上章のいう「境遇性」にあたる。

さらに、一定の期間を表わす名詞は、単独形ではその期間全体を、二接形ではその期間のうちのある特定の時間を表わすという。

23 午前中 ずっと おまちして いました。

24 午前中に お客さんが みえました。

これは吉澤が指摘したことでもある。

時詞は、外国人への日本語教育でも厄介な問題なので、そのたちばからの発言がいろいろある。国際交流基金の〈教師用日本語教育ハンドブック〉③『文法 I 助詞の

諸問題』(1978)の執筆者は鈴木忍さんである。その書は全八十項からなり、【40】わたしは早く起きて、朝に勉強します、【41】夜に月が見えます、【43】長いあいだに文通しました、——以上三項が広義の時詞に関わる問題だといえる。

鈴木忍さんは時詞を四分している。原著の番号をローマ数字にかえて語を少しあげる。

I 「に」をとらないもの

きょう・きのう・今晚・先週・来月・毎日・来年

II 「に」をとるもの

10時に・3日に・2月に・日曜日に・江戸時代に

III 両方の形をとるもの

正月(に)・春(に)・午後(に)・ごろ(に)

IV 「に」をとるかとらないかによつて意味のかわるもの

午前中(に)・3年間(に)・あいだ(に)

そのうえで、先掲鈴木重幸さんの著書の説明と23・24をひき、「に」の着脱に関する大まかな基準にはなるが、両方をとる語が多すぎて学習上の困難点になっている、という。それこそが【40】の問題なので、「昼」「晩」にはつく

「に」が、なぜ「朝」にはつきにくいのかと思案を巡らせている。ともあれ、IVをたてたのは本書の功績である。わたしの関心は「に」が下接しないはずのIの類にあること、いうまでもない。

佐治圭三『日本語の文法の研究』(ひつじ書房 1991)

第四部の「時詞と数量詞」の章では時詞を二分し、右のIに相当する語を相対時点詞、II以下に相当する語を固有時点詞と名づけた。『国語学大事典』(東京堂出版 1980)の「時の名詞」の項では、「一九四五年八月一日ニ 戦争ガ終ツタ」のばあいの時の名詞は、絶対的な時点を示しうるので、絶対名詞としての時の名詞とした(奥津敬一郎執筆)。本稿ではこの両説を折衷して、『相対時点詞』と『絶対時点詞』とよぶことにする。

当面の課題については、これだけわかればいだろう。とにかく、相対時点詞が二接形にならないことはいずれの論者も認めており、疑問を挟む余地はないらしい。

時詞をさかのぼる

前節でみた時詞をめぐる議論は現代語についてのものである。この説明は時代を遡っても適用できるだろうか。時

詞の歴史を少したどってみよう。

湯澤幸吉郎『徳川時代言語の研究 上方篇』（1936）の第三章「体言の用法」中に、「〔丙〕助詞の附かない場合」という項がある。出典表示を省いてひく。

・私もゆふべ此の絵のそばに居ましたれば……

・小者も連れずに先刻参つて宿を頼……

・夕霧が死んで後萩野に逢うて……

・湯に入つて来る間留守をせよ

右の例文などをあげて、「助詞が附かないで、その儘の形で連用修飾語に用いられる事がある。」（傍点は引用者）と書いてある。初め二つが相対時点詞、あとの二つが絶対時点詞の例文に相当するが、著者はその違いに意を用いていないようだ。とまれ、本書にひかれた相対時点詞には、現代と大きな差がなかったとしてよいだろう。

室町時代の時詞の実態について論じた日本人の著作をわたしはしらない。そこで、ロドリゲスの『日本大文典』（土井忠生訳 三省堂 1955）について。「あらゆる動詞に共通する構成法」の条の「如何程長いかといふ時間」「何時かといふ時間」の両項では、かなり神経質に助詞「に」の着脱に言及している。その意図するところを要約し、A

ないしEに類別して例語・例文を摘記する。

A 年齢についていうときは、時詞に「に」をそえる。

十五になる。いくつになる。

B 時間の長さをいうときは、時詞に間・程をそえる。

十五年ほど、又は、十五年の間

C 継続を意味するときは、往々「に」をそえる。

三年にこれを書いた。

幾日に召された、又は、幾日のあいだに、云々。

D いつかというには「に」をそえるという。

先に。先刻に。日々。

E 「に」がなくても盛んに用いられる。

去年、昨日、今年、今日、近日、この程は、

一日は、去年は、今日は、このごろは、

昔見たる人は今は少なし。

なんと、ロドリゲスの観察は近代日本人の研究水準に達していたといえるのである。

現代の用法と異なる点があつて精確な比較はしがたい。特にC・Dがそうである。Dは相対時点詞だと思いが、「先刻」が二接形で用いられた実例はしらない。未詳としておく。残るEは、まさに相対時点詞の中核に位置するも

ので、現代語との違いはないようである。

平安時代の状況を源氏物語に探ることにする。江戸時代・室町時代と異なつて対象になる語は漢語が激減し、ほとんど和語になる。去年・昨年に相当する和語「こそ」は十五回の使用をみ、動詞を修飾するのは「入り給ふ」にかかる一例だけである。「あす」二十一例のうち、動詞にかかる二例ともに単独形である。四十例ある「きのふ」のうち、動詞にかかる三例ともに単独形である。

「いにしへ」は百を数える。そのほとんどが名詞としての使用で、動詞の修飾語としての用例は、『対訳源氏物語新釋』によると、初音の巻の「いにしへ盛りと見えし御若髪も、年頃に衰へゆき」だけである。ほかに、係助詞「は」「も」、副助詞「だに」の接した十数例がある。二接形「いにしへに」は、歌語としての生命は長く保つたが、散文用語としては用いにくかつたようである。

奈良時代については、適当な散文資料がないので、他の時代と比べようがない。萬葉歌については、さきに「昔」「いにしへ」をみたとおりである。「こそ」「あす」「きのふ」については、源氏物語における使用と異なるところはない。

以上、大雑把な見渡しであるが、日本語史を通じて時詞の用法に大きな変化はなかったとしていいだろう。

和語と漢語の時詞

冒頭に掲げた七項に用いられた二接形のうち、6の「翌年」と7の「翌日」には説明がある。6はテレビドラマの解説、7はエジプト革命についての発言なので、話し手自身を基準にするわけではない。『国語学大辞典』(1980)の「時」の項に「前日、翌年、やがて」を例示して、「話の内容にある時点を基準にするもの」(高橋太郎執筆)とする語に相当する。いわば、広義の相対時点詞なのである。

続いて掲げた20までにみえる時点詞の多くは漢語で、和語は14「おとし」、18「この春」の二語にすぎない。拾いえた相対時点詞も、漢語二十八種に対して、和語はほかに「昔、今年、あさつて、近ごろ、おとし」の五種だけである。しかも和語の用いられた回数ごく少ない。

出所は、大半が新聞、ウェブ、ラジオ、テレビであり、総合雑誌から得た材料は少数である。エッセイにはときどき出現するが、近年の小説からえた例はない、めつたによまないせいもあるが。ここには文章の練り方の違いも絡ん

でいるように思う。

萬葉歌、伊勢物語から現代の昔話に至るまで、「昔」は相対時点詞の代表とすべき語だと思いが、これも二接形で出現することがある。

25 クズ拾いの人たちがかなり昔に関西に作った共同体（『別冊文藝 追悼特集 須賀敦子』p.42 河出書房 1998）

26 自分ははるか昔にこの国と因縁を結んだものである（岩波新書『漢文と東アジア』p.135 2010）

これらは文頭の例ではないが、わたしは漢語の相対時点詞ほどの違和感は覚えない。いずれも修飾語を伴うことで違和感が和らいでいるようだ。「昔」の時間幅は過去へ無限に広がっているのだから、ある時点をさすときは何ほどかの限定が必要である。その限定役が修飾語なのだろう。ほかに「交流少ない昔に」「ずいぶん昔に」「ごく大昔に」なども拾ってある。

時詞と文体

さて、絶対と相対とを問わず、時点詞で始まる文章は多い。叙事的な文章の代表格たる平家物語は、巻第二の「治

承元年五月五日の日」以下、かなりの巻が絶対時点詞で始まる。さながら年代記である。森岡健二『要説日本文法体系論』（明治書院 2001）の「助辞なしの題示法」は、これに関する詳細な研究であるが、ここでは三上章『現代語法序説』（くろしお出版 1972）の簡潔な記述をかりる。三上は、単純報告体ともいべき文は提示の「は」なしに成立する、極端にいうと「は」を一回も使わずに一冊の本を書くこともできる、歴史の年表がそうだ、として「大同元年——空海ガ唐カラ帰朝シタ」を例にあげた。

平家物語巻頭の年次を相対時点詞「昔」にかえたのが、伊勢物語の「昔、男ありけり。」であった。この「昔」は、一文の述語「ありけり」にかかるのは勿論のこと、さらにこの段全体に及んでいる。そう考えるのが物語論の常識である。一方、時点詞に助詞「に」がつくと、係りゆく先はその一文中の近い述語に限られる。係り受けがかわるのである。十分にねられた文章だと思いが、実際にわたし自身が判断に迷った例を、井上靖『風濤』（講談社 1963）第二部一章からひく。

七月二十五日に達魯花赤として開京に留まつていた赫徳が母国に召し還されて開京を發つた。（p.177）

これは赫徳が開京をたった日付だろうとは思いますが、不安が残るし、文脈にも確かな材料がえられない。その前兆が二ページ前にあつた。

二月下旬に元に入朝している金方慶からの最初の使者が来た。(p.175)

同じ構文による曖昧さである。さらに八行前の一文は、一つきりの述語に救われている。

二月十九日に突如として元より蠻子軍（南宋軍）一千四百がはいつて来た。(p.176)

著書の書き癖なのだろう。

文体に関して見すごせないことがある。日本語の構文において、述語にかかる成分の典型的な排列は、上から、時・所・動作主（主格）の順になる。昔話の冒頭「昔、ある所に、おじいさんが云々」がまさにそうである。そして、文頭におかれる時詞は単独形、文中にでる時詞は二接形であることが一般である。右にみた井上靖作品の時詞の曖昧さは、それが崩れたことによるのだ、とわたしは考える。

さて、報道の文章には、右の典型と異なるものが溢れている印象がある。去りし二月十九日の朝日新聞朝刊の国際面 (p.9) をみるだけでもそれがわかる。

・中国の習近平・国家副主席は17日、5日間の訪米を終えて次の訪問先……

・ブラウン・カリフォルニア州知事は17日、習氏を招いた昼食会で……

・ドニロン大統領補佐官が18日、現地入りして自制を促す見通しだ。

絶対時点詞が文中に単独で出現する例が圧倒的に多いのである。このページには単独形が十三例、二接形が四例、「には」の接した形が一例で、文頭におかれたものは皆無である。

このことに着眼した記述がある。『新版日本語教育事典』（大修館書店 2005）の「時を表す二の使用・不使用」の項である。絶対時点詞は「に」を伴うのが基本だとしてうえで次のように書いている（日高水穂執筆）。

「首相は1日、記者会見を行った」のように「に」を伴わない表現も行われるが、これは書きことばの文体の特徴であり、話しことばでは「に」を伴うのが普通である。

これは放送のニュースでも用いられるので、確実に日本人の文体を変えていくだろう。

新聞のデータベースから

先に「時詞の文法論」の節でみた諸氏の研究によると、連用修飾語としての相對時点詞のニ接形は現代語に存せず、それは中世まで遡れることでもあった。わたしは、八年前たまたま気づいてから、耳目にふれた例を拾っただけのニ接形である。それが各種の表現媒体に出現するのだから、特定の人の使用に限るものではないだろう。

そこで、データベースによる小さな調査で、実際に多くの用例をえた。その結果の一部を示す。初めは朝日新聞の『聞蔵Ⅱビジュアル』による昭和六十年の例である。

27 米国の対日赤字が昨年（きんねん）に三百七十億ドルという史上最悪を記録した。（4夕刊）

28 来春（らいしゅん）に東京で行われる主要先進国首脳会議（サミット）。（9朝朝刊）

その十年後、平成二年の中日新聞のデータベースから。

29 一九九五年以後になるだろうと言われていた完全撤退が、来年（らいねん）に実現します。（5朝朝刊）

30 来年（らいねん）に、より詳細なエリアに分けた「街区整備計画」を決め、順次着工する。（11朝朝刊）

四半世紀前と十七年前の記事であるが、各語について両紙ともなお多くの用例があり、とても近年の増加とは思われない。

一昨年秋の名古屋本社版朝日新聞朝刊（2010.9.19）、社会面の四割近くをしめる「現場発」欄に、志村英司記者の署名いり記事「万引き 私は負けない 追跡で大けがの女性Gメン」がある。

・ 昨秋、大きなけがを負うまでは――。
・ 数年前、下着やシャンプーを盗んだ女子中学生を捕まえた。

・ 来春、プレートなどの除去手術を受ける。

・ 後日、その中学生が店を訪ねてきた。

・ 男は事件の翌日、強盗致傷の容疑で逮捕された。

五つの時点詞はすべて単独形である。記者は日次記のように簡潔な文体を意図したのかもしれない。かくて、ニ接形を使用する傾向は、時代よりも人の要素が大きいのだと思う。

研究者は実態を観察せず、既成の説に安住して規範的な記述を踏襲しているのかもしれない。わたしはそう考えて模索するうちに、日本語教育専門家の著述に遭遇した。泉

原省二『日本語類義表現使い分け辞典』（研究社 2007）である。第三章「順接確定条件」の「⑱時間＋に」の条に、「時間＋に」は「時間の点」を表わすのに対して、「に」のないばあいは「時間の線」を表わす、として次の例文などがあげてある。

- ・ 来週、お伺いします／旅行していて留守をします。
- ・ 来週に、お伺いします／×旅行していて留守をします。

時点詞の絶対／相対の別に着目した箇所ではないので、ここで言及されては、著者は迷惑かもしれないが、相対時点詞「来週」の二接形の例が専門書に登場したのである。わたしの語意識は反発するのだが、意味を強める効果を感じているのかもしれない。

辞書や文法書の記述をこえて、実態はここまで来ているというべきなのだろうか。

結びにかえて

本稿でみてきたことを一言でいうと、相対時点詞の単独形と二接形の差異が消滅する現象が進行し、単純化が進んでいるらしい、ということである。時点詞には常に助詞

「に」がつくことになれば、その絶対／相対の別を考える必要がなくなる。それなら、単純化は日本語の効率的な運用に寄与する、好ましい変化だということになるが、ほんとうにそうだろうか。わたしは懐疑的である。

冒頭に掲げたクイズに対して、読点がたりないという声のあったことを紹介した。前節の志村記者の記事では、時点詞の次に必ず読点がうたれている。なぜだろう。読点を削ると、五例のうちの三例では、次の文節と漢字が続いて誤読の恐れが生ずる。このような文字列では、目障りではあるが、読点をうって誤読をさげることがある。それはわたし自身の表記法でもあるが、志村記者も同じように配慮する人なのかもしれない。他方、わたしの目についた実例の多くには、漢字列の連続に配慮した節はみえない。やはり、相対時点詞の二接形が拡大する背景にそのことは考えらるに及ぶまい。

実例が新聞・放送・ウェブに多いことを先に指摘した。締めきりに追われる報道の世界にあつては、表現を練り、修辭にこる十分な時間がないだろう。そこで、本道からそれた表現がうまれるのかもしれない。

以上、歯切れの悪いまとめである。いつの日にか、多量

のデータに基づいて明確な結論に到達したい。その日ができることを信じて、結論がない旨の節題である。

なお、二接形に助詞「は」「も」の接した、「来週には」「昨年にも」などの形態は、今回の考察対象にしなかった。論点が広がって記述が複雑になるからである。

(二千十二年三月)

追記 ウェブサイト „tenki.jp” の「開花予想〈第6回〉」

に次の文を見つけた。

本日（3月21日）に、全国のトップを切って高知市の桜が開花しました。

(初校のおり、余白に記す)